

ケインズと精神医学

山崎好裕

I はじめに

19世紀から20世紀に至る大衆論のなかで、群衆概念から公衆概念が区別されていくという経過がみられる。古典的な群衆論はギュスターヴ・ル・ボンによって展開されたが、これを批判したのがフロイトとその弟子にして友人であるポール・フェダーンであった。フロイトたちが問題にしたのは、ル・ボンが、個人の心理から説明しなければならない群衆の心理を実体化しているということであった。しかし、同様の批判はフロイトたちの遥か前にジャン-ガブリエル・ド・タルドによって行われていた。タルドによれば、群衆が身体的接触を伴って形成されるのに対し、公衆は社会のなかに分散して存在していながら、全くの同型性を持った近代的構築物である。

こうした公衆観は哲学者ハイデッガーの取り上げるところとなった。ハイデッガーは現存在の頹落したあり方を「ひと」と呼んだが、これは紛れもなく無人称化した公衆の姿である。フロイトから精神分析を学んだルートヴィヒ・ビンズヴァンガーは、すぐにハイデッガーの『存在と時間』の虜になった。ビンズヴァンガーは精神分析のように心的構造を前提にして患者に迫るのではなく、統合失調症¹⁾を「ひと」に頹落できない病と見る現存在分析を開拓していくことになる。

時あたかも1930年代である。ヨーロッパ知識人が広く公衆概念を共有するようになった同時代の空気を吸いながら、ケインズは『一般理論』を出版しようとしていた²⁾。

II 『貨幣論』におけるフロイト

ケインズは1930年に出版した『貨幣論』のなかで、フロイトの議論に言及している。ここでケインズは根深い金本位制への執着の理由を考えるにあたって、フロイトとその弟子たちの説を

1) ビンズヴァンガーは鬱病についても分析しているのだが、現存在分析の適用を相応しくないと考えた彼は、エトムント・フッサールの超越論的現象学を踏まえた分析を試みる。気分を含めた意識野の開かれ方に問題があるという鬱病の把握は、患者の実感に極めて合致しているのではないだろうか。

2) 本稿のフルペーパーは <http://www.econ.fukuoka-u.ac.jp/researchcenter/workingpapers/WP-2017-007.pdf> からダウンロードされたい。

引いているのである。ケインズによれば、フロイトは、人々の「潜在意識の深所」³⁾に、「金が強い本能を満足させ、象徴として役立つ」⁴⁾何らかの理由が存在しているとした。そして、ケインズは、フロイトの弟子であるアーネスト・ジョーンズの「予言」⁵⁾を肯定的に引用して、彼が当時最新の精神医学思想であった精神分析を信奉していたことを示している。ジョーンズの「予言」とは、人々の心理に根差す黄金欲が、第一次世界大戦後にイギリスがいかなる犠牲を払っても金本位制に復帰しようとする無意味な努力に繋がっているというものであり、まさにケインズが戦おうとしている傾向であった。

実はこの時期、精神分析フロイト派の中心地は、フロイトの母国オーストリアからケインズのいるイギリスに移ろうとしていた。フロイトは、当初の同志アルフレッド・アドラーと1911年に、国際精神分析協会の初代会長を委ねたカール・グスタフ・ユング⁶⁾と1913年に決別している。その一方で、1920年になると、現在も国際精神分析協会の機関誌として存続している『国際精神分析』が創刊されているのだが、これを行ったのがジョーンズであった。そして、ナチス・ドイツの影が忍び寄るなか、ジョーンズとマリー・ボナパルトの助力で、フロイト一家は1939年ようやくロンドンに到着できたのであった。

ケインズがフロイトを引用してみせた1930年は、ちょうど、このような精神分析激動時代のただなかであった。そして、その引用からは、ケインズが当時最先端の精神医学思想である精神分析に深い関心を持っていたことが示されているし、その後、ケインズの経済学が精神医学思想と密接に関わりながら展開されていくことが予告されていると思われるのである。

III 『一般理論』における公衆

『一般理論』のなかに大衆の心理面についての記述が多いことは知られている。まず、第24章「一般理論の導く社会哲学に関する結論的覚書」において、「利子生活者の安楽死」⁷⁾について語っている部分である。ケインズは経済を停滞させる主因として、利子生活者たちの貨幣愛を批判の対象としてきた。それは、『貨幣論』におけるフロイト精神分析からの引用を継承するものに他ならない。

第2は、株式投資に関する記述に見られる群集心理の描写である。第12章「長期期待の状態」において、ケインズは株式市場の状態を決定づけるものとして群集心理をあげている。これがフロイトたちによる群衆論の諸議論を念頭に置いたものであることは論を待たない。この群集心理

3) Keynes ([1930] 1971, vol. 6, 258 / 訳 259).

4) Ibid., 259 / 同上.

5) Ibid. / 同上.

6) ユングは、フロイトのもとに来る前、チューリヒにあるブルクヘルツリ精神病院に助手として勤めていた。このときの上司が、統合失調症の概念を提起することになるオイゲン・プロイラーである。

7) Keynes ([1936] 1973, vol. 7, 376 / 訳 376).

を読むことが「女人筋の投資家」⁸⁾の最重要な関心事となる。そして、ここに現れるのが有名な美人投票の比喩⁹⁾である。投票者全員の平均的な好みに近かった投票者に賞品が与えられる美人投票では、「平均的な意見はなにが平均的な意見になると期待しているかを予測すること」¹⁰⁾に専念しなければならない。ここで3次元の領域に到達しているとケインズは言う。さらに、「4次元、5次元、それ以上の高次元を実践する人もある」¹¹⁾であろう。

ケインズが『貨幣論』から『一般理論』へと転回を遂げるなかで、多用されるようになった用語に公衆がある。公衆の語は『一般理論』のなかに29回登場する。それらは、消費性向など大衆の心理的な分析の行われている箇所や利子率に関する箇所に多く現れている。

IV 公衆の経済理論としてのケインズ経済学

消費性向について、ケインズはそれを決める客観的要因と主観的要因を区別して論じている。第9章「消費性向—(II)主観的要因」において、ケインズはピンスヴァンガーの現存在分析を想起させるように、「吝嗇」の動機と消費動機との「目録」を列挙している。「吝嗇」の動機は「用心」、「深慮」、「打算」、「向上」、「独立」、「企業」、「自尊」および「貪慾」の8個である。また、消費動機については「享楽」、「浅慮」、「寛大」、「誤算」、「虚飾」および「浪費」の6個があげられている¹²⁾。その上でケインズは述べるのだが、これらの「美德」と「悪徳」は総消費額の決定に何の役割も演じないのである。と言うのも、これら大衆の心理状態は極めて安定しており、これらに変化することで消費性向が変化することはない。だが、古典派は「吝嗇」という「美德」に敬意を払っていた。そう言えるのは、古典派は「吝嗇」によって消費性向が抑制され、資本蓄積が促進されると考えていたからである。だが、その消費行動において実に保守的な公衆の時代にこうした考えは該当しない。古典派は、利子率が必ず完全雇用を達成するように統制されているという隠された想定を持っていたが、こうした非現実的な想定が成り立つ場合のみ、「美德」

8) Ibid., 154 / 訳 156.

9) ここで想起されるのは、精神分析家ジャック・ラカンの「欲望は他者の欲望である」というテーゼである。ラカンは鏡像段階論を1937年に発表し、精神分析学界で一躍注目される存在となった。幼児は最初自分を統一体として認識できず、単に動物的なエスとしてのみ存在している。つまり、現実界の存在なのである。しかし、鏡に映った自分の姿を他者として確認することによって、統一的な自我を確立するに至るのである。このように自我は他者から想像によって類推された、その意味で想像界に属すものである。さらに、他者は言語や社会規範といった他者A、すなわち、大文字の他者として自己のうちに内面化されるが、こうして生じる超自我は象徴界に属する。このような自我の確立過程で、人は他者が何を欲望しているかを見て自己の欲望を生ぜしめるのだが、これは長じても続き、人々が価値と認めるものを自分も価値と認める傾向となる。実に公衆の姿そのものではないだろうか。

10) Keynes, op. cit., 156 / 訳 157.

11) Ibid. / 同上.

12) Ibid., 108 / 訳 107.

が支配力を回復する¹³⁾。

公衆はその行動において、他人との一致を望むのだから慣行に従っている。第12章「長期期待の状態」はそうした慣行を支える長期期待についての分析である。人々は行動を決定するとき、「均等確率」を前提とした平均値である「保険数学的期待値」に従うことができない¹⁴⁾。だから、抛り所のない人々は実行可能な最善の策として慣行に従うという道を選ぶのである。慣行の生まれてくる元は長期期待である。公衆の長期期待はしたがって、極めて硬直的で頑迷なものである¹⁵⁾。

このように硬直的な長期期待は、利子率の決定においても根源的な要因として働く。第15章「流動性への心理的および営業的誘因」において、ケインズは明確に述べる。利子率は「高度に心理的な現象であるよりもむしろ高度に慣行的な現象である」¹⁶⁾と。利子率の現実の値は、「その値がどうなると期待されるかについての一般的な見解」¹⁷⁾によって支配されている。ここに顔を出すのも美人投票のメカニズムであるが、要は利子率が政策的な変更を容易に許さないような、硬直的な性質を持っているということを言いたいわけである。

ケインズは経済学の文脈で、バラバラだが互いに同型の大衆である公衆を発見した。この同型性がケインズに、公衆を一つの行動様式を持った消費者として観念することを可能にした。したがって、理論記述においては、これらの公衆を一体のものとして扱い、分析することが可能になる。こうして、マクロ経済学の方法論が生み出された。しかし、現実には、個々の消費者は所得水準を異にするし、消費性向もかなり異なっているであろう。となると、集計量を元にして消費性向を算出したとしても、それはどの個人にも該当しない、全くもって架空のものになるほかない¹⁸⁾。さらに、関数関係を仮定する計量モデルを作り、データを用いてそこからパラメーターを推定したところで、所得分布が変化しただけで、そのパラメーター推定値は不安定に変動することになる¹⁹⁾。したがって、そのような推定には意味がなく、ケインズにしてみれば、見果てぬ夢を追う錬金術に他ならないわけである。

13) Ibid., 111-12 / 訳 110-11.

14) Ibid., 152 / 訳 150.

15) だから、ケインズの発想からは「大衆の期待に直接働きかける政策」は出て来ようもない。現代日本の金融政策とその効果のほどは、ケインズの正しさを、事実をもって証明していると言えるだろう。

16) Keynes, op. cit., 203 / 訳 201.

17) Ibid. / 同上.

18) 現代マクロ経済学の代表的個人モデルでは、全体の算術平均である、どこにも存在しない個人を理論の基本的前提としている。ケインズの公衆論から見たとき、その前提がいかに異様に映るかは言うまでもないだろう。

19) 方向性は真逆であるものの、結論はルーカス・クリティークと同じである。

V お わ り に

本稿で扱ったのは、ケインズ経済学と精神医学思想との関わりであった。本稿は、精神医学思想を媒介にすることで、公衆概念の発見がケインズの理論構築に決定的な役割を果たしている可能性を示した。公衆概念を軸にしてケインズ経済学を解釈するとき、それがマクロ経済学体系でなくてはならない必然性が明らかになる。さらに、現代マクロ経済学における代表的個人という設定に対する批判的視座を確保できるのである。

(山崎好裕：福岡大学)

参 考 文 献

- Binswanger, L. 1954. *Le rêve et l'existence, traduit de l'allemand par Jacqueline Verdeaux, Introduction et notes de Michel Foucault*. Paris: Desclée de Brouwer. 荻野恒一・中村昇・小須田健記『夢と実存』みすず書房, 1992.
- . 1956. *Drei Formen missglückten Daseins: Verstiegtheit, Verschlobenheit Manieriertheit*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 宮本忠雄監訳・関忠盛訳『思い上がり ひねくれ わざとらしさ—失敗した現存在の三形態』みすず書房, 1995.
- . 1957. *Schizophrenie*. Pfullingen: Verlag Günther Neske. 新海安彦・宮本忠雄・木村敏訳『精神分裂病』I・II. みすず書房, 1961.
- . 1960. *Melancholie und Manie: Phänomenologische Studien*. Pfullingen: Verlag Günther Neske.
- Federn, P. [1919] 1980. *Zur Psychologie der Revolution: die vaterlose Gesellschaft*. In *Analytische Sozialpsychologie*, Bd. 1. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Freud, S. 1913. *Totem und Tabu. Einige Übereinstimmungen im Seelenleben der Wilden und der Neurotiker*. Wien: Hugo Heller.
- . 1921. *Massenpsychologie und Ich-analyse*. Wien: Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
- Heidegger, M. 1927. *Sein und Zeit*. Halle a. d. S.: M. Niemeyer. 熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫, 2013.
- Husserl, E. 1939. *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*. Prag: Academia.
- Keynes, J. M. [1930] 1971. *A Treatise on Money*. In *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vols. V and VI. Cambridge: Cambridge University Press. 長澤惟恭訳『貨幣論』、『ケインズ全集』第5・6巻, 東洋経済新報社, 1980.
- . [1936] 1973. *The General Theory of Employment, Interest and Money*. In *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. VII. Cambridge: Cambridge University Press. 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』、『ケインズ全集』第7巻, 東洋経済新報社, 1995.
- Le Bon, G. 1895. *Psychologie des foule*. Paris: Félix Alcan. 桜井成夫訳『群集心理』講談社学術文庫, 1993.
- Tarde, G. 1901. *L'opinion et la foule*. Paris: Félix Alcan. 稲葉三千男訳『世論と群集』未来社, 1964